大分合同新聞（朝刊）　2016年（平成28年）11月11日　金曜日

〝理想の居場所〟目指し

子ども食堂でフィールドワーク

交流通じ改善提案へ

青が咲く

連携授業

体験型の主権者教育を実践する大分大学経済学部と大分合同新聞社の後期連携授業で、1～4年の学生30人が大分市内の「子ども食堂」でフィールドワーク（体験交流活動）に取り組んでいる。体験を通して「家族、地域、社会の在り方を考えてほしい」と同学部。今後、子どもたちの理想的な過ごし方を提案することにしている。

子どもたちに勉強を教える大分大学生
＝7日午後、大分市、撮影・鈴木幸一郎

「こんばんは。今日はよろしくね」―。11月上旬の午後6時、1年の男女2人が同市敷戸西町の子ども食堂「すみれ学級」を訪れた。この日集まった小・中学生は計18人。宿題を教えた後、同じテーブルを囲んで夕飯を食べ、同8時まで一緒に過ごした。

フィールドワークは12月上旬まで続く。「男児たちと新しい遊び（絵しりとり）を楽しんだ。興味を持ってくれてうれしかった」と富場美咲さん(19)＝同市。木下裕太郎さん(19)＝同＝は「子供たちが気軽に集まれる場所になっている」と感じた。

共働き世帯や貧困家庭の支援、孤食解消などを目的に県内でも子ども食堂の開設が相次いでいる。県社会福祉協議会によると、現在9市の16団体・個人が各地域で運営。無料や低料金で食事を振る舞い、子どもたちの「居場所」をつくっている。

すみれ学級は今年8月、市内の医療関連会社が薬局跡地で始めた。運営は週3日で、学習支援に力を入れる。責任者の榎田雅文さん(63)は「地域で勉強や宿題ができる場として定着してきた。大学生がいろんな取り組みに挑戦してくれている。今後の改善につながれば」と期待する。

学生は班別に順次訪問。他の子ども食堂の見学・交流も計画しており、体験を基に「1日のスケジュール」「勉強や食事以外の行事」などを提案、グループ発表する。

連携授業は包括的な連携協定に基づき、今春スタートした。後期は「地域社会の課題解決型ワークショップⅡ」と題し、前期に続いて本紙記者2人も非常勤講師として参画している。

（萱嶋悠）